



2007.10.10

147

編集 樋口 みな子

E-mail  
minginga@agate.  
plala.or.jp  
郵便振替  
「銀河通信」  
02740-7-56535  
(6号分1,000円)

## ナナカマドの実が真っ赤になりました

暑い暑い夏でしたが、爽やかな風が気持ちの良い季節になりました。庭のナナカマドの実が赤く色づき、コリンゴも赤くなりました。少しずつ秋が深まっているようです。毎朝、天窓から流れる雲を眺めながら我が家の朝が始まります。

大雪山系の旭岳では初冠雪が観測されました。9月23日に雌阿寒岳、30日に夕張岳に登って来ましたが、紅葉は5分目ぐらい。地球温暖化のせいかもしれない年より紅葉も遅いようです。

去年は、噴火が活発で登れなかった雌阿寒岳に山の仲間と野中温泉から登りました。アカエゾマツの樹林帯が気持ち良かったです。4合目を過ぎると視界が開けませんが斜面は急勾配になります。後ろを振り返ると、樹海の中にオンネトーのブルーが鮮やか。

火口壁をたどると黒い阿寒富士を背景に噴煙が上がりまるで地球が生まれた時の光景を見ているような迫りに圧倒されました。

前日は白湯山自然観察路の展望台から見た阿寒湖に垂直に延びた円錐形の雄阿寒岳が美しかったです。

夕張岳は登山道のロープ撤収作業を9月30日に終え林道も閉鎖され、来年の山開きまで静寂に包まれます。毎週のように登っていた山とは少しの間お休みします。



噴煙を上げる雌阿寒岳の火口(9月23日)



我が家のナナカマド

しばらくは読書や家族との時間も大事にしたいと思います。

殺伐としたニュースが多いですね。亡くなった小田実さんは、もっと大きく開かれた日本であったのが、今、日本人は誇りと自信を失っているように見えると語っていました。流されない自分を持っていたいものです。



オンネトー畔から望む雌阿寒岳(左)と阿寒富士(右)



# 山の環境を守るために

樋口 みな子

日高・幌尻山荘のバイオトイレ見学と清掃登山が15日から17日の2泊3日で行われ、最終日の排泄物担ぎおろしに参加しました。

歩くと4時間はかかる取水ダムまで、清掃登山のためにバスが出ましたが、途中で、前日の大雨で林道が崩落し、歩くことに。ダム地点に着いたのは10時です。天気の良い日は何でもない渡渉ですが、額平川はかなり増水していました。11時50分に山荘に到着。山荘で待機していた人たちは道



9月17日前日の大雨で林道が崩落しバスから降りてダム地点まで1時間歩く



ザックにパッキングした排泄物を前に、いざ出発＝9月17日



腰近くまである四の沢付近の渡渉に緊張を強いられる

路の不通は想像していなかったようで、事故でもあったのではないかと心配していました。

早速、今年の7月から稼働したバイオトイレを見学し、日高山脈ファンクラブ事務局長の高橋健さんから説明を受けました。

バイオトイレは固液分離式で、小水はタンクに貯留し、石灰と混ぜて埋め立て処理。大便是バイオで分解処理するという方法です。大便是1日に100回程度の使用が可能という触れ込みでしたが、50人の利用でオーバー状態だそうです。また、バイオトイレは1基しかなく、大勢の利用者に対応できません。そこで貯留式の仮設トイレ2基が平



バイオトイレの仕組みの説明を聞く

## 幌尻山荘排泄物汲み取り隊

取町山岳会によって設置されています。仮設トイレの排泄物を利用者のいない昼間にバイオトイレで分解する計画でしたが、バイオ処理槽の菌の働きが良くないとのことで、投入実験は進んでいませんでした。現状はすでに飽和状態の排泄物があり、山を美しく保つために、登山者による担ぎ下ろしが必要です。山荘の排泄物249結は一斗缶28個、4リットル缶13個にパッキングされています。私も4リットル缶を担ぎ、1時に山荘を出発。四の沢付近の水深の深さと流れの速さに緊張しながらも、15時に取水ダムに着きました。軽トラに、24人全員分のザックを積み込み、崩落



沢沿いにニリトコの実が赤くなって秋を感じさせる

地点を越えてバスまで歩きました。振内鉄道公園内の便槽に全員で排泄物を投入して18時に作業を終了。バイオトイレは万能ではありません。うまく稼働させるには現地の気温や天候など十分に調査しつつ、処理槽の温度設定を検証する必要があります。来年も山荘の仮設トイレの排泄物担ぎ下ろしはなくなりそうにありません。バイオトイレをせめてもう1基設置し、快適に稼働するように設置業者の適切な対応が求められます。仮設トイレでは紙の持ち帰りにもご協力ください。担ぎおろしのボランティア、あなたも体験してみませんか？



# 夕張岳の高山植物は今！

9月29日に夕張で「夕張岳の高山植物は今！」というタイトルで小野有五さんの講演を聴きました。夕張市清水沢の会場には50人でいっぱいになりました。夕張を元気してくれるヒントがたくさんあるお話でした。夕張岳をジオパーク（地質遺産）にしよう！高山植物のことだけを守ればいいのではない。ジオパークの目で見ると、夕張岳や夕張炭田の地質の面白さが伝えられるとか、夕張岳のナキウサギはどこにでもいるのではない、何万年もの歴史をかけて棲みついて、大雪のナキウサギとはDNAが違うというのには少しびっくりしました。夕張岳をさまざまな視点から見ると、たくさんの方が夕張岳を大事に思い、運動の輪も広がるのではないかと話され、パーと目の前が開けたように思いました。



講演する小野有五さん

地球温暖化を真っ先に受けるのが高山植物、個人の努力だけでなく国の政策も変えて行かなくてはと、「不都合な真実」を例にとったお話に共感しました。

30日は夕張岳に登りました。林道が30日で閉鎖されるので、ユウパリコザクラの会員だけでなく新聞記事を見た人など27人が参加しました。

私は2年ぶりの夕張岳でした。7時25分、登山口駐車場を出発。アカエゾマツの針葉樹林帯が気持ち良く、ウラジロナナカマドの紅葉がきれい。1時間45分で石原平に着きました。そこから、登山道のロープ撤収組と登山組に分かれました。ユウパリコザクラの会の水尾さんから「みな子さんは、撤収班に入ってカメラお願いね」というわけで、石原平から吹き通しま



でのロープの撤収を5人の男性が手際良く行うのに同行しました。前岳の紅葉が美しい。昨年、春に登山道の整備をユウパリコザクラの会が行った時に、道に要請していた崩壊した部分の登山道には新しい木道がつけられて、とても歩きやすくなっていました。

ガマ岩崩落地コースのロープの効果が現れて、ユウパリコザクラが増えていました。「これがコザクラの葉だよ」と仲間が教えてくれました。雪崩れ斜面にしかなかったユウパリコザクラです。来年は是非ユウパリコザクラのラに会いに登りたい

と思います。

吹き通しはすごい風で吹き飛ばされそうになりました。ヤッケを着込み、素早く撤収を終えました。11時半終了。風の当たらない場所で昼食をとり、11時55分出発。望岳台付近から見る前岳の紅葉に光があたって素敵！ 写真を撮りたいなと思っているうちにメンバーはささと下山の足を止めないので、目に焼き付けるだけにとどめました。

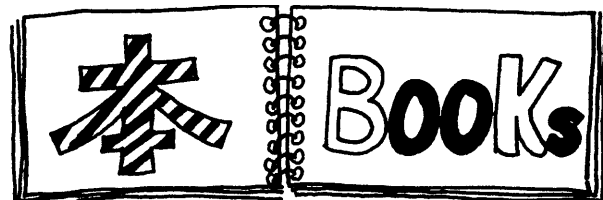
2時半に駐車地点に戻り、作業登山を終えました。



登山道のロープを撤収するユウパリコザクラの会の会員

## 「あの戦争から遠く離れて」 城戸 久枝著

情報センター出版局 1600円



日中の国交が断絶していた1970年に28歳で帰国を果たした著者の父城戸幹（中国名は孫玉福）さんは中国残留孤児です。

本書は日本生まれの残留孤児二世の著者が「父と私と異国の祖母」の物語を10年がかりで書き下ろしたノンフィクションです。

幹さんは貧しいけれど、優しい養母に大事に育てられ村一番の秀才に。北京大学を目指して猛勉強しますが、日本人であることを表明したために不合格になります。文化大革命の嵐が吹き荒れていた時代でした。なんとしても日本

に帰りたいと何百通もの手紙を日本の赤十字社に送り、独力で日中の厚い壁をこじ開け帰国を果たした半生に胸が熱くなりました。

著者は、父の帰国後日本女性との二女として生まれ、父の苦難の歴史を知らずに普通の大学生になります。20歳の時、中国・大連でホームステイ先の女性と街を歩いて自分が踏んでいるマンホールの蓋までが満州国時代の物であることを知った瞬間、日本人がこの地を統治し暮らしていた事実を実感したと書いています。さらに滞在先で読んだユン・チアンの「ワイルド・スワン」から文化大革命の苛酷な歴史を知り、その暗黒の時代に自分の父がこの国で生きていたという事実には圧倒されるのです。

21歳で中国・吉林大学に留学し父の足どりを辿り始めます。著者自身も反日の感情を向けられたりもするのですが、一方では父を育てた祖母の縁者との情愛にあふれた交流も描かれ、中国人の温かさも伝えています。

現在31歳の著者久枝さんが、父の半生を描くことは戦争を問い直すことでもありました。「戦争のないことが当たり前に感じられる現在、それが当たり前では亡かった時代があったことを忘れないために。あの戦争に端を発する父の物語をもうひとつの戦後史として記録しておきたかった」と記しています。娘でなければ書けなかった労作で、父の苦難の人生が報われたものになって感動しました。戦争の悲劇として片づけられない、書き残さねばならないという切実感が伝わってきます。

## 「私の祖国は世界です」 玄 順恵著 岩波書店 2400円

在日コリアンであり水墨画家として活躍している著者の自伝的エッセーです。7月30日に亡くなった作家の小田実さんの妻ですが「人生の同行者」と呼んでいました。

著者は、植民地時代に済州島から渡ってきた両親のもと、神戸で7人姉妹の末子として生まれ育ちました。韓国の軍事政権に拘束された詩人、金芝河の釈放運動の中で小田実さんと出会い8年に結婚。



両親は韓国籍、姉のひとりには北朝鮮に帰国し、日本で暮らす姉たちは、韓国籍と朝鮮籍に分かれ、家族の中でも朝鮮半島の分断に直面してきました。著者は「私は何者か」という問が常にあったと言います。

結婚後さまざまな国で暮らし、中国で朝鮮半島の歴史的運命を知り、自分をみつけたと語っています。ドイツ、アメリカ暮らしを経て著者が見つけた答えは「人生の痕跡を抱きしめながら自由でいる個人、つまり世界人」であるといい、一人の個人が堂々とまっとうな市民として生きて行くことなのだと思うと結んでいます。

小田実さんとは21歳もの年の差がありながら、お互いに尊重しあった対等な関係がとても素敵です。夫の小田さんは死を目前にしながらかつて後書きに「彼女の少女時代につきあった日本は大らかで懐が深かった。今は失いつつあるがもう一度そんな日本を取り戻して欲しいと願っている。そこに玄順恵の日本に対する並々ならぬ愛情を感じると」と記していて民族や、国家を越えて理解し合うことこのかけがえのなさを教えられました。



「GANさんが遡行(ゆく)北海道沢登り三昧」

岩村和彦・著



2007年6月  
共同文化社刊  
A5判 238頁  
定価 2100円

「沢登りをやってみよう」と思う登山者も多い。しかし沢に関するガイド本は少なく、読図力がなければ危険も伴うためか、沢登りをする登山者は限られていた。

本書は昨年出版した『GANさんが遡行(ゆく)北海道の沢登り』の第2弾。前者では「沢登りの面白さが伝わった」「楽しく読めた」「写真の臨場感がよかったね」などの感想が多く寄せられたという。今回はより多くの人に沢の魅力伝えたいとのGANさんの強い思いから、初級者向けに、全26ルートを地図、写真とともに紹介する沢登り紀行である。

雪だけが待ちきれずに、沢の魅力にすっかりはまり、体力の衰えを技と気力で乗り越えて行くGANさん。次々現われるナメヤ、大滝やゴルジュ。沢の奥深くで息づく高山植物の美しさに心洗われる。まさに知られざる北海道の秘境である。



撮影 土屋孝浩さん

GANさんの沢によせる様々な思いや、同行者とのたわいのない会話やエピソードが、ユーモアたっぷりに記載されていて楽しい。GANさんは、山をいつまでも美しいままで楽しみたいと「山のトイレを考える会」の代表、「山の道を考える会」の事務局を務め、沢登りの合間に環境問題、登山道の整備にも取り組んでいる。本書には、沢登り愛好者が増え、夏山の「極集中による問題が緩和・分散化され、環境問題にも役立てた」という願いも込められている。

前者と合わせて遡行した52ルートに、難易度を示し、読者の参考になるように工夫も凝らしている。沢登りの面白さが臨場感たっぷりに紹介されて、筆者も沢の魅力にはまったひとりである。改めて、百名山にない厳かな自然に感動を覚えた。

(樋口みな子)

「中流の復興」 小田 実著 NHK出版 740円

小田実といえばベ平連。私も学生時代、何度かベ平連のデモに参加したことがあります。戦争に反対する意思表示するにはベ平連のゆるやかな連帯が私には合っていました。

75歳で亡くなった小田実さんは、普通の市民が普通の感覚で平和を考えることの大切さを語っています。

生活レベルで考えれば中流とはとても思えないし、抵抗もありますが小田さんが語っているのは「戦争は嫌だ」と言うこと。戦争になれば普通の人も被害者になるばかりではなく、戦地に行くと加害者になる事を平易な言葉で語り、市民自らが政策を持つことを提案しています。特に市民による教育の「政策提言」が素晴らしいです。教育の役割について「それぞれ

が自由にお互いの人生を満喫しながら、平和で民主的な社会をかたちづくり、そこで生きるために生まれてきた。そして教育とは自由な人生を満喫するための土台作りとしてある。人間は学習と教育を通して、ヒューマニズムに基づく批判的精神を培い、大勢に流されず、自分の頭で考え、社会に責任をもてる個性的な人間として成長していく。」と語っています。

大勢に流されずに自分を持っているだろうかと考えさせられました。

フィリピンの民主化のために奔走しているさなかに末期がんに倒れ、渾身の力を振り絞って書いた、私たちへの遺言です。

購読料をありがとう 8月5日～8月31日

福田光子(秋田市) 海老名名保(札幌市) カンパも含めて 山本治美(札幌市) 10,000円 海川敏雄(函館市) 3,000円

土本武司(札幌市) 3,000円 藤内英夫(札幌市) 5,000円 (敬称略)

合わせて24,000円は印刷、送料に使わせて頂きます。

パソコンでも読めます。郵送不要な方はメールでお知らせください。

## 「池澤夏樹の旅地図」 池澤夏樹著 世界文化社 2800円

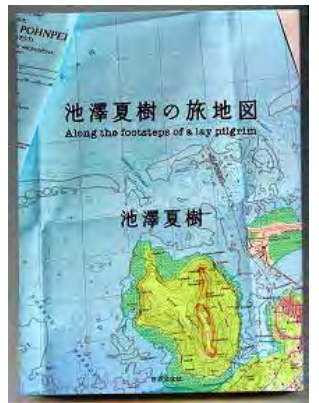
旅する作家、池澤夏樹にとっての旅の意味を多面的に探っています。定住はしないけれど観光者の目ではなく、一年以上はその地に暮らし生活者の目で、ギリシャや沖縄やフランスの風土や人間性を語っています。

本人のエッセー、旅の同行者によるレポート、インタビュー、池澤夏樹を写した旅写真あり、本人が写した写真、旅シネマの紹介あり、旅先の本屋で地元の本を手に入れる楽しみなど、旅というキーワードで丸ごと一冊池澤夏樹が詰まっています。

インタビューの中で「旅は文化とか文明について考えるという大きな枠があって、その中で、今見ていることは全体の中のどこに位置して何を意味しているのかと考える」と語っています。海外にいるからこそ、日本を意識するし、日本がよく見えるのだとも言えます。

今回、初めて幼年時代に暮らした帯広を語っているのが興味深かったです。四代目の北海道人だと思っている著者に親近感を覚えました。

表紙の世界地図が美しく何度も触りたくなります。私の誕生日に友人から贈られた大切な本です。



## フリーダム・ライターズ (米) 監督 リチャード・ラグラヴェネーズ

# 映画

1944年、ロス暴動後の荒廃した公立高校に赴任した新人教師エリン(ヒラリー・スワンク)は生徒たちを信じ、ノートに日記を書かせ、「アンネの日記」を読ませます。

生徒たちの生活環境には、人種差別、ドラッグ、銃がはびこっていました。15歳にして卒業まで生きていられたら十分と思っている生徒達は、互いを理解しようともせず憎しみ合うだけでした。

想いを綴ることは自分と向き合うこと。心を開くこと。そして、心を繋げること。

エリンは「アンネの日記」を読む事をすすめ、ナチのホロコーストは人種差別から生まれたこと。アンネが書くことでつらい日々を耐え、未来に希望を持ち続けたと話します。他の人を理解しアンネを重ね合わせてさらに飛躍していく生徒達の成長が素晴らしいです。エリンがひたむきに生徒達と向き合う姿に感動しました。

彼らは、自分たちのことをフリーダム・ライターズと名付け、お互いを知り、知ることを通じて未来への希望を見つけて行きます。書くことで自信をつけ大学に進んだ生徒も多かったようです。

実話を基に教育現場の奇跡を真っ向から描き、ヒラリー・スワンクのエリンが、知的で温かく良かったです。

札幌では短い上映で知らなかった人も多いのではないのでしょうか？希望を持たない若者たちには是非観てもらいたいと思います。



岩の間からコバルトブルーの海が美しい



## 小樽・赤岩胎内巡り

8月20日、トレッキングで小樽赤岩に行ってきました。

赤岩の番人である沼崎勝洋さんの案内で、下から巨岩に向かって歩き高度感あふれる胎内巡りをしました。岩の胎内にお地藏さんが祀られ私も家族の健康を祈りました。エビス岩と大黒岩が眼下に見え、コバルトブルーの海がきれいでした。

大正時代？まであった赤岩温泉跡まで沼崎さんと探検。那須火山帯の赤岩海岸に温度が低いけど温泉が出たとの事。建物は跡形もありませんが、漁が栄えた頃、人力車で漁師を温泉宿まで運んだそうです。あった！赤茶けた岩の間から、冷たい温泉がわき出ていました。駐車場から1時間でたどり着きました。

赤岩を知り尽くしている沼崎さんだからこそ、発見出来たのでしょね。



シッコ Sicko

(米)監督 マイケル・ムーア



命の輝きを燃焼させる皆実 (麻生久美子)



米軍グアンタナモ基地に向けて呼ぶかけるマイケル・ムーア監督

映画評 夕凧の街 桜の国

原爆への静かな怒り

マイケル・ムーア監督による銃社会を告発した「ポウリング。フォー・コロンバイン」、イラク戦争を批判した「華氏911」に続いて、今回はアメリカの医療保険制度にメスを入れたドキュメンタリーです。

アメリカには国民皆保険制度がなく、民間保険が幅を利かせています。救急車を呼んだら、予約してないから保険料は支払わないと言われてたり、がんなのに、保険金を出し渋られて死亡した例などたくさんの人にマイクを向けてインタビューしています。

最も残酷だと思ったのは、入院患者が医療費が払えず、街に捨てられる場面でした。まるで姥捨て山です。日本でも老人医療費が値上げされ安心して医療を受けられない現実があります。

安心して医療を受けられるカナダ、イギリス、フランスなども取材しています。特に印象的だったのはフランスの国民性です。ムーア監督がフランスの若者にマイクを向けると「アメリカでは国民が政府を怖がっているけど、フランスでは政府が国民を怖がっている」と発言。その後パリを中心街のデモがその言葉を象徴していました。

ムーア監督は9・11で救助活動をした消防士ら数人の患者と、キューバに乗り込み最新の医療を受けるシーンが圧巻です。医療がどんな人も無料で受けられるのです。アメリカで120ドルもする薬がわずか5セントで買える事を知って涙を流す消防士。キューバの人々の屈託のない笑顔はたとえ病気になっても安心して医療を受けられるからなのだとなんとも納得しました。

日本も人ごとではありません。病気になっても医療を受けられない老人が増えています。私もちょっと腰を痛めて受診したら、MRIなどの検査で1万円近くの医療費に驚きました。医療改悪には断固反対です。

第9回手塚治虫文化賞新生賞を受賞した、この時代の同名コミックの映画化です。

被爆から13年後の広島で皆実(麻生久美子)は母と暮らし、同僚の男性から求婚されます。皆実は被爆した心の傷と、自分が生き残った罪悪感に苦しんで、男性からの好意を受け入れられずにいます。やがて原爆症を発症して短い命をとじますが、なにげない日常を

丁寧にすくいと、命の輝きを燃焼させる皆実の姿が胸に迫ります。「原爆は落ちたんじゃない、落とされたんよ」と叫ぶ皆実の言葉が被爆者の苦しみを象徴していました。皆実の哀しみを受け止める恋人の「生きとつてくれてありがとうな」の言葉が心にしみました。

場面は転じて現代。皆実の弟の旭(堺正章)は家族に何も告げず広島に向かいます。父の行動に不審をも

つた娘の七波(田中麗奈)は密かに同行して、今まで知らなかった家族のルーツを見つめ直します。七波の母も被爆者でした。突然、血を吐いて死んだ母の姿を忘れようと封印してきた七波でした。

皆実の50回忌に、皆実の弟である父が、広島でゆかりの人たちを訪ね歩く姿を通して父や伯母の思いを知り、被爆2世である自分を見つめ直すのです。死者の

命を平和へとバトンタッチして行こうとする、若い七波の心の変化が素敵です。家族、兄弟、恋人との愛にあふれた人生を描き、生きることの喜びや平和への願いが胸にしみみます。ささやかな幸せを奪った原爆への怒りが静かに伝わってくる作品。是非、ご家族で観ていただきたい映画です。

(札幌、旭川、苫小牧、函館などで上映中)



## 山は美しいままで 山のトイレデー



撮影 仲俣善雄さん

9月2日旭岳でのトイレデー仲俣さん、小枝さんチームで参加しました。

8時半のロープウエーに乗り、姿見の池で、「山のトイレを考える会」の幟を立て、9時からマナー袋を登山者に配布しました。快晴なのに、登山者は少なめ。観光客が8割でしょうか？それでも10時過ぎから、数人ずつの登山者がゆっくりと登ってきて、しばし姿見の池で憩い山頂に向かって行きました。

マナー袋は、ずいぶん浸透していて、「大事なことです」と受け取ってくれました。昨日黒岳でもらったという男性もいました。120人近くに配布しました。

パークボランティアも清掃とパトロールをしていましたが、金庫岩近くで10個のティッシュを回収したと言っていました。今日は少ない位だそうです。ティッシュの持ち帰りが当たり前になって欲しいですね。

雄大な旭岳と、流れる雲を眺めてのんびり楽しいトイレデーでした。



撮影 仲俣善雄さん



撮影 小枝正人さん



撮影 みな子 いわし雲

## 紅葉の沢登り

チロロ川三俣沢から1373m峰へ

晴天の10月6日、札幌を朝3時に出発して日高のチロロ1373m峰に登りました。

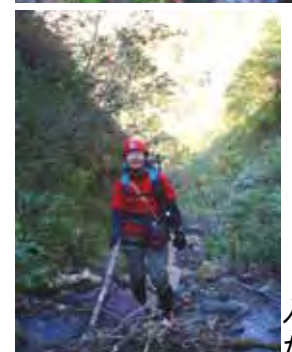
秋の沢は初めての体験で寒さや難所への不安もありましたが、ベテランGANさんがリーダーなので参加を決めました。男性3人、女性3人で二股のゲートを6時15分に出発。取水ダムまで歩き入渓。林道からはウラジロナナカマドやウラシマツツジの紅葉が太陽に当たって輝いて素晴らしい。最初の1時間はやたら倒木が多く、木をくぐったり、よじ登ったりと難儀しながら進みます。分岐で、珍しくGANさんが右か左かとししばし悩んでいました。地図では三股沢になっているのにどう見ても2本しかないのです。帰りに、倒木で隠れていたのを見つけて納得しました。分岐まで2時間かかりそこから右に見える西峯ははるかに遠い。つらい藪こぎに時間もとられるとの判断で、分岐から左に入り、1373mの無名峰を目指すことになりました。

沢としてはあまり特徴はないのかも知れませんが紅葉の中を行く沢は気持ちが良い、この季節にしては水が冷たくなく快適でした。

小滝に歓声をあげて進むもやがて、川幅は狭くなり1305mで源頭に。一滴の沢水から大きな沢になる源頭は何度見ても感動を覚えます。ここからが辛い藪こぎ。かなりの急斜面を、笹に足を取られながら進むと40分で頂上。11時45分でした。振り返ると、北戸蔦別岳がすっきりと青空に浮かび、ダケカンバが黄金色に輝いていました。

山頂ではにぎやかにカレーラーメンでランチタイム。ラーメンに揚げを入れるのはじめてでしたが意外と美味しい。帰りは同じ沢を下りましたがあんなに苦労した倒木だらけの沢は、鹿道を選びあっという間に着きました。ゲートには2時45分でした。

女性が3人だったのもとてもリラックスできました。下山後、筋肉痛はありましたが疲れが残らなかったのは、沢の清涼感でしょうか？



撮影 土屋孝浩さん

